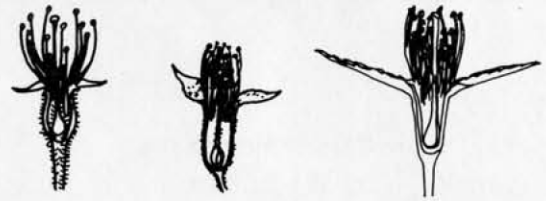


どうして、公園のソメイヨシノには実がならないのかと言うと、このサクラは、雑種だからです。たとえば、ヤマザクラの花の花粉が、虫に運ばれて、同じヤマザクラの花のメシベにつくと、やがて種(タネ)ができます。このタネが、芽をだして大きくなっても、やはり、ヤマザクラですね。こんどは、ヤマザクラの花粉が、別の種類のオオシマザクラというサクラのメシベについたとします。そして、タネが実ったとします。すると、このタネから芽ばえてくるサクラは、何というサクラになるのでしょうか。ヤマザクラのようでもあるし、オオシマザクラのようでもある。これを、ヤマザクラとオオシマザクラとの雑種といいます。

雑種は、普通、両方の親の性質を持っていて、種類によっては、生長が速くなったり、大きく育ったりすることがあります。けれども、雑種は、花粉ができないので、タネを作りません。もしできてそのタネは、発芽しません。

さて、ソメイヨシノという雑種の両親は、エドヒガンとオオシマザクラです。(下図)。花は、両方の親の中間の形をしています。しかし、タネが実ることは、めったにありません。

一つ問題ができました。タネができないソメイヨシノは、どうやってふえるのでしょうか。これは、人間の手をかりなければなりません。つぎ木といって、ソメイヨシノの枝を少し切りとってきて、オオシマザクラの切り株に植えてつてふやします。



エドヒガン ソメイヨシノ オオシマザクラ
(おた みちひと：植物担当)

化石は語る —その2—

——フズリナ(紡錘虫)——

後藤 道治

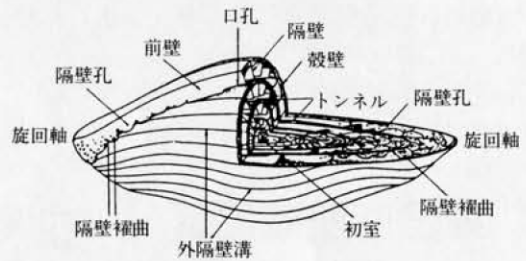
日本には石灰岩とよばれる岩石が豊富にあり、その多くは、昔、海にすんでいた生き物の殻や骨などがかたまってきたものです。そのような石灰岩の中にはたくさんの化石が入っています。フズリナはその化石のうちの一つです。

日本名で紡錘虫といいます。その名前は形が糸をつむぐ紡錘に似ていることからつけられました。フズリナはアメーバのような単細胞動物ですが、その殻の構造は複雑です。一本の回転軸を中心にして石灰質の殻が成長し、殻の中はたくさんの壁で仕切られています。殻の大きさはふつう米粒大ぐらいですが、1mm以下のものから6cmぐらいになるものまであります。

地球の歴史からみると、フズリナは一つの種類の生きている期間が短かく(とはいっても100万年の単位ですが)、新しい種類のものが次々と現われました。また、数が多く、世界中で化石がみつかります。このような特徴をもったフズリナは地層の年代を決定したり、地層と地層を対比させたりするのにたいへん役立ちます。フズリナが生きていた時代は今から約3億4000万年前の石炭

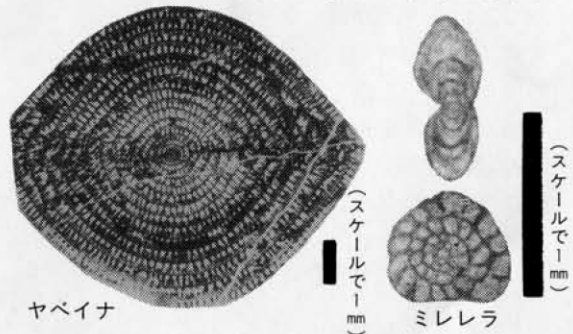
紀前期から約2億5000万年前の二畳紀後期までの間です。

富山県内にはフズリナの出る石灰岩はみつかりませんが、近県では新潟県の青海や岐阜県の実濃赤坂が有名です。



フズリナの殻構造

朝倉書店 微古生物学上巻より



(ごとう みちはる：古生物担当)